クリスタルタワーの頃

北村　弘行

阪神・淡路大震災

兵庫県公害研究所を退職してから（社）瀬戸内海環境保全協会に席を置くようになった。事務所の所在が転々とした。兵庫県民会館を振り出しに三宮に在る交通センタービル。そこで阪神・淡路大震災に遭遇した。マグネチウド（M）7.3 の地震規模でビルは崩壊した。川崎重工（株）の在るＪＲ神戸駅東側のクリスタルタワービルに移転した。事務所はその後、大丸神戸店南側の建隆ビルへ、落ち着いたかと思ったが脇浜海岸通に建設されＷＨＯが在る通称ＩＨＤセンタービルへ移った。都合５ヶ所で過したことになる。これから記すメモはクリスタルタワーへ通勤していたころの想い出の一こまからのあゆみである。

司馬遼太郎さん

その頃、週刊朝日に司馬遼太郎の連載「街道をゆく」に三浦半島記が掲載されていた。《一掬の水》として紹介があったところを以下、私なりに要約した。

昭和 19（1944）年３月、神戸の川崎重工で竣工し、大鳳（たいほう）と名づけられた世界最強、最新、最大の空母があった。空母から飛びたった小松兵曹長が海面をふと見ると魚雷が雷跡を曳いて母艦に近づいていた。かれはとっさに機を降下させ、魚雷に体当たりして死んだ、という。この自己犠牲はまだ体当たり特攻が組織されていない頃である。

火事を消すのに、両掌で結んだ水を掛けてもむなしいが、しかし敗色の濃いこの時期のひとびとはみなそのようにして命をすてた。

小松兵曹長がみつけた魚雷は、米潜水艦アルバコーアが放ったものだった。大鳳は小松機の体当たりによって雷跡に気づき、面舵一杯で回避したが右舷前部に、魚雷一本が命中した。被害は軽微であったが、前部のガソリンタンクに破孔が生じた。魚雷を受けたのは午前 8 時 10 分で、大爆発をおこしたのは午後 2 時 32 分であった。乗員 2150 名の内 500 名をのぞき、ことごとく死んだ。不沈空母といわれたほどの防禦力があだになった。兵器というのは、常にそういう矛盾を持っている。

川崎重工の造船設計部では、この薄命におわった艦を惜しむあまり、昭和 28 年ごろから精密模型をつくりはじめ、やがて社宝として残した云々。

大鳳を訪れて

クリスタルタワーの川崎重工（株）本社事務所のエントランスには社の歴史を

かたる船舶や車両の模型が陳列してあった。会社で当時環境部門を担当しておられた知人に週刊朝日の《一掬の水》を話し、大鳳の模型を拝見したいと頼んだ。艦船の模型は神戸工場で保管しているということで、紹介してくださった。連絡をうけて訪問した。震災後のことで整理も進んでいないが、と聞いていた。ガラスのケースに入った無傷の模型、ケースは破損しているが本体は無傷なもの。商船、軍艦など大別され並んでいた。ただ一体の空母の模型が床に落ちていたという。それが大鳳だった。高角砲、艦載機の模型ははがれ落ち、もとの場所は不明のままにまとめてあった。

悲しい運命に終わった南太平洋での最後を思い、いままた模型の痛ましい姿を眺めるにつけ胸がしめつけられた。

それから 13 年の月日が過ぎた。

「一掬の水」からの連想

最近、南米アンデス地方の先住民キチュア族に伝わる民話の日本語訳が評判になっている。読むほどに内容は多くの意味合いをもっているので紹介したい。

《ハチドリのひとしずく》

森の中では、動物たちが平和に暮らしていました。
ところが、ある日、森は山火事になってしまいました。
動物たちは、何をしていいのかわからず、
逃げ惑うばかり・・・・
ウサギ、狸、鹿、小鳥たち
みんな逃げることに必死でした。
それを見ていた、小さなハチドリ。
数キロ先の湖に向かって飛んでいきました。
その小さなくちばしに水を含んで森に帰っていきました。
口の中のひとしずくの水を、燃え盛っている火をめがけてポトリ。
ハチドリはまた湖に向かって飛んでいきました。
次第にハチドリの羽は焦げ、力もなくなりかけましたが、
それでも何回も繰り返し水を運びつづけました。
動物たちは、それを見ていて
「そんなことをして、いったい何になるんだ」
といって笑います。
ハチドリはこう答えました。
「私は、私にできることをしているだけ」

終わりに

いま、多くの人々が懸念している、地球環境問題に対処するにも、このハチドリの物語が大いなる示唆にみちており、賛同者が多いという。

「一掬の水」が投げかける一人のおこない、また、ハチドリの物語を知るにつけ、あらためてこの世で、地球に生を受けているわれわれに、一人ひとりの小さい努力の大切さを語りかけているのでは。心に刻まねばと感じるこのごろである。（了）